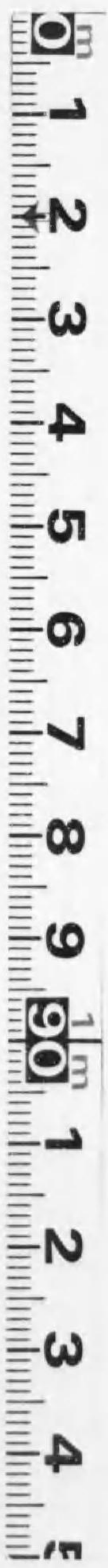


506

250



始



506-250

明治天皇御製謹註

巨理章三郎謹解

東京
明治圖書株式會社發行

大正
11. 9. 23
内交

序

「天地を 動かすばかり 言の葉の まことの道を きはめてしがな」
「言の葉の まことの道を 月花の もてあそびさは 思はざらなむ」
「眞心を 歌ひあげたる 言の葉は 一たびきけば わすれざりけり」

本書の序文に於いては、右の御製を掲げ奉るの他に、一辭一語の
贅すべきものがない。

大正十一年六月

著者 謹識

例言

二

一、本書は、別著「教育勅語と御製」に掲げ奉つた御製二百三十五首に、更に一百二十一首の御製を加へて、其の歌詞の大意を註解したものである。

一、御製排列の順序は、第一より第二百三十五までは、「教育勅語と御製」に掲げてあるのと全く同じである。以下は著者の一種の考へによつたもので、従來の和歌の分類法によつたものではない。

一、すべて、詩歌の解釋に於いては、作者の意を其のまゝに述べるといふことは、頗る困難であつて、一首の歌が幾様にも解せられる。もと教訓の意を有しないものが、教訓として

解せられたり、教訓的のものを、さう解しなかつたりすること、往々に、存することである。「教育勅語と御製」に於いては、教訓の意義を見出し得ると考へたものを、適當と思ふ處に掲げ奉つた。本書に於いては、單に、御製の歌詞を、平明に、簡易に、解釋することを主とし、他は之れを拜誦する人々の、自らの解釋に譲つて置いた。

一、解釋は【語釋】の處で、語句を解し、【通釋】の處で、全體の大意を解することを、原則とした。

一、従來、明治天皇の御製の解釋には、

明治天皇 御製謹註 やまと心 佐佐木信綱謹註

御製 謹註 天津日影 池邊義象・彌富濱雄著

三

明治天皇御製謹解

渡邊新二郎撰

四

などがある。本書は、これ等を参考し、これ等に負ふところが少なくない。又、本書に就いては、中野傳治氏の力を煩はしたことが多い。こゝに謝意を表して置く。

一、卷末の索引は、御製の第一句に就いて作つたものである。

斯道叢書編著の趣旨

斯の道、教育に關する勅語に仰せられてある「斯ノ道」の宣揚に、微力を献げたいといふのが、我れ等終生の本願である。此の本願を達する一端の仕事として、時に觸れ機に會し、適當ともふ題目に就いて短編を草したものが本叢書である。

斯の道は深遠であり、崇高であり、又莊嚴である。其の普遍相からいへば、古今中外に通ずる。其の特殊相からいへば、我れ等の特有のものである。かくの如き道は、もとより我れ等の容易に究め盡し得る所ではないが、我れ等の心におもひあたる所を、其のまにくに記述したものが、本叢書の各編である。其の内容は、斯の道の普遍の方面を主とすることもあるれば、其の特殊

の方面を主とすることもあり、或は其の兩者を併せたものを主とすることもある。又、其の程度も比較的、高尚なものもあれば、極めて平易な童話のやうなものにすることもある。要するに、斯の道の宣揚に微力を献げることが期したといふ點に於いては、すべて皆一つである。

大正十年正月

著 者 識

い

いその上……………(四)

いつくしと……………(一三)

いさがある……………(一七)

今の世に……………(六四)

今はとて……………(七五)

暇なき……………(七)

古の……………(八二)

岩が根も……………(九五)

家富みて……………(二三)

營みは……………(二七)

いぶせしと……………(二九)

祝ふぞよ……………(二九)

いかに世は……………(三三)

石だたみ……………(三九)

如何ならむ事に遇ひても……………(四一)

岩が根の……………(四三)

如何ならん樂すゝめて……………(四五)

五十鈴川……………(五七)

石垣の……………(七)

いくさ人……………(一五)

勇み立つ……………(一六)

家なしと……………(一九)

池水に……………(一九)

伊勢の海の……………(二三)

磯崎の……………(二四)

池水の……………(二七)

いそのかみ……………(三七)
 萩の戸の……………(二七)
 拂はずは……………(五二)
 花になり……………(二三)
 端居して……………(四二)
 新ばりの……………(一九)
 庭のおもに……………(八五)
 庭草に……………(二九)
 ほとよぎす……………(二五)
 星のとぶ……………(三〇)
 へだてなく……………(二四)
 常磐なる……………(五)
 ともしればあらぬ方にと……………(二四)

とこしへに……………(三)
 ともしれば浮き立ち易き……………(五)
 時計る器は前に……………(七四)
 としぐに雪をかさねて……………(六)
 ともしればかき濁しけり……………(九)
 ともしれば人を遅しと……………(一〇四)
 時計る器の針も……………(一〇)
 とる棹の……………(三)
 年々に思ひやれども……………(二五)
 年立ちて……………(一九)
 とりぐに……………(一九四)
 遠山の……………(一〇四)
 とのる人……………(三六)

ち

ち 千萬の民の心も……………(一八)
 千萬の民と共に……………(一九)
 千代呼ばふ……………(四三)
 千早振る……………(八六)
 塵の世に……………(一〇一)
 千萬の民よ心を……………(一六二)
 千年には……………(二六九)
 千萬のあだを恐れぬ……………(二七六)
 散る花の……………(三三)
 折りぐに……………(一〇)
 重荷引く……………(三〇)
 親も子も……………(四〇)
 おもふこと思ひ定めて……………(四四)

おを

及ばぬを……………(四五)
 及ばざる……………(四九)
 おもふには……………(五〇)
 おもふ事おもふがまゝに……………(五二)
 老の波……………(五七)
 幼子が物がく跡を……………(七〇)
 幼子が習へば習ふ……………(七一)
 大空に……………(七九)
 おのが身を修むる道は……………(八三)
 鬼神も……………(八七)
 行はむ……………(九二)
 奥山の……………(一一)
 おのがじし力盡して……………(二六)

思ふこと貫かん世を……………(二三)
 おのがじし務めを終へし……………(二七)
 おのが身を顧みずして……………(二六)
 沖つ浪……………(二三)
 大八島……………(三六)
 思ふことおもふがまゝに……………(二六)
 おもほえず……………(二九)
 治まれる……………(二九)
 思ふ事つくらふことも……………(二七)
 おくりにし……………(二九)
 おち鮎の……………(二三)
 をちこちに尾花波よる……………(二四)
 遠近に薬打つ音も……………(二四)

わ

大空の……………(三五)
 思ふことうちつけにいふ……………(三九)
 吾が心及ばぬ國の……………(六)
 若竹の……………(二)
 吾が心至らぬ隈の……………(二六)
 我が苑に……………(六)
 わけばやと……………(六)
 われと我が……………(一〇)
 我が國は……………(一〇)
 わらはべが……………(一五)
 若葉さす……………(一〇)
 わたの原……………(一〇)
 わらび折る……………(三三)

か

若草の……………(三二)
 櫃原の……………(三)
 神代より……………(九)
 上つ代の……………(三)
 賢きも……………(八)
 假庵の……………(二五)
 限りなき世に残さんと……………(二五)
 神垣に……………(二七)
 かちどきの……………(二九)
 神代より承け継ぎし世は……………(二五)
 神代より流れたえせぬ……………(二六)
 神つ代の……………(二七)
 限りなき天つ御空を……………(二六)

よ

かぎりなき大海原の……………(三〇)
 風の音は……………(三九)
 世の人を……………(一八)
 四方の海……………(一八)
 世の中にひとり立つまで……………(六)
 よきをとり……………(六)
 世の中に危きことは……………(八)
 よしあしを……………(一〇)
 世の中の人におくれを……………(二)
 世の中は……………(二)
 歡びを……………(三)
 世の中の人のつかさと……………(三)
 世は安く……………(三)

た

- 寄りそはむ……………(一七〇)
- 世は如何に……………(一七三)
- 世と共に……………(一八〇)
- たらちねの庭の教は……………(二一)
- 田に畑に……………(三三)
- 立ち續く……………(二五)
- たらちねの親の教を……………(三六)
- たらちねの親の心は……………(三七)
- たらちねのみ親の教……………(三七)
- たらちねの親の心を……………(四〇)
- たらちねの御親の御代の……………(四二)
- たらちねの親の御前に……………(四三)
- 正しくも……………(四四)

な

- つかさ人……………(七)
- 積りては……………(一〇三)
- 燕飛ぶ……………(二六)
- 傳へ來て……………(二六)
- つはものの糧も秣も……………(二六)
- つはものゝ心と共に……………(二七)
- つはものと……………(二八〇)
- 何事も……………(四九)
- ならび行く……………(八三)
- 浪風の靜かなる日も……………(二五)
- 夏の夜も……………(二五)
- 夏知らぬ……………(二六)
- 浪の上に……………(一〇一)

そ

- 戦のいとまある日は……………(六〇)
- 竹馬に……………(六三)
- 戦ひの爲に力を……………(六四)
- ためしなく……………(六五)
- 種なくて……………(七一)
- たらちねの御親の御代に……………(一八七)
- 旅人を……………(三六)
- 空高く……………(三三)
- 空音かと……………(三三)
- 罪あらば……………(三三)
- つねに身の……………(四七)
- つく杖に……………(五)
- 杖つきて……………(六)

む

- なる神の……………(一〇五)
- 浪の音……………(一〇七)
- なみたかき……………(一〇)
- 波風のあらしといひて……………(一一)
- 長くなり……………(二六)
- むら肝の心をたねの……………(二四)
- むら肝の心つくして……………(三六)
- むら肝の心を廣く……………(四八)
- むら肝の心の限り……………(二七)
- 打乗りて……………(五)
- うつはには……………(九六)
- 打ち向ふ……………(一〇)
- 埋火に……………(一〇九)

梅の花……………	(一一〇)
空蟬の世に立つほどは……………	(一一四)
うつせみの人の心の……………	(一二四)
うつせみの世の爲すゝむ……………	(一二四)
うけつぎし……………	(一二九)
空蟬の世は安らかに……………	(一三五)
うつせみの人のまことを……………	(一三六)
植え置きし……………	(一三七)
埋火をかきおこしつゝ……………	(一三六)
海原は……………	(一三九)
國民の一つ心に……………	(一九)
國民の上も心に……………	(二四)
覆る……………	(五二)

國の爲仇なす敵は……………	(五)
國といふ……………	(八九)
くろがねの射し人も……………	(九二)
國民の力の限り……………	(一七)
くろがねの船もたやすく……………	(二三)
國を思ふ……………	(四〇)
國の爲たゝすなりにし……………	(四七)
國の爲斃れし人を……………	(四八)
國の爲いよゝゝ盡くせ……………	(五)
國民は一つ心に……………	(六一)
國の爲心盡くして……………	(六一)
くもりなき人の心を……………	(六五)

國民も常に心を……………	(一九〇)
國の爲ふるひし筆の……………	(一九八)
雲霧も……………	(二五)
草雲雀……………	(三三)
國民のことばの花を……………	(三六)
くもりなき心の底の……………	(四二)
山を抜く……………	(九〇)
易くして……………	(九六)
山の奥……………	(一八六)
山風に……………	(二六)
前になり……………	(三四)
窓の内に……………	(五四)
まき柱立てし心を……………	(五四)

窓の戸を……………	(一〇八)
政事……………	(一四)
眞木柱立ち榮ゆるも……………	(一六)
まごころを限りなき世に……………	(一七)
丈夫に……………	(一八)
まうで来る……………	(一九)
眞心を歌ひあけたる……………	(二六)
今朝は又……………	(三〇)
冬深き……………	(三)
文机の塵拂はんと……………	(七)
文机の上に夜露も……………	(八〇)
更くる夜の……………	(一四)
笛となり……………	(一八)

降る雪を……………(一八二)
 降る雪の……………(一八三)
 富士の嶺に匂ふ朝日も……………(一九一)
 故郷の……………(一九六)
 臥す龍の……………(二〇〇)
 富士の嶺も……………(二〇七)
 ふる雨に……………(二一四)
 富士の嶺に初雪見えて……………(二二三)
 ふむ人は……………(二四一)
 苦むせる……………(二七)
 事なくて……………(二二)
 小山田の……………(二六)
 子を思ふ……………(三五)

駒に乗る……………(五)
 心なく……………(七一)
 事しけき……………(七六)
 言の葉の誠の道を……………(八八)
 心ある……………(一〇五)
 事しあらば……………(一二五)
 事なしと……………(一二七)
 子等は皆……………(一四〇)
 九重の臺の竹の……………(一七三)
 九重の雲居に匂ふ……………(一七八)
 漕ぎ出で……………(二一〇)
 木高くも……………(二二六)
 此ごろは……………(二二九)

あて

言の葉の上匂ひて……………(二四〇)
 言の葉の花の色こそ……………(二四〇)
 こともなく……………(二四二)
 照るにつけ……………(二四三)
 あら玉の年を迎へて……………(一)
 葦原の瑞穂の國の……………(二)
 天さかる……………(二三)
 雨に思ひ……………(二三)
 縣守……………(二七)
 過を諫めかはして親むが……………(四)
 過を諫めかはして國の爲……………(四)
 暑しとも……………(六)
 あらはし……………(六)

雨垂りに……………(七三)
 朝の間に……………(七四)
 秋の夜の長くなるこそ……………(八一)
 天地を……………(八九)
 浅みどり……………(九二)
 天をうらみ……………(一〇一)
 新しき年を迎へて……………(一〇六)
 葦原の國富まさんと……………(一一五)
 朝けぶり……………(一二九)
 天の下……………(一三〇)
 あづさ弓……………(一三三)
 仇し野に……………(一三六)
 曉の……………(一三五)

秋の夜の寢覺め靜かに……………(二五)
 秋の夜の長きにあかす……………(二六)
 あら玉の年もかはりぬ……………(二七)
 新玉の年の終りも……………(二七)
 あさな〜……………(二八)
 新玉の年立ちかへる……………(二九)
 新らしき年のほぎ言……………(二九)
 あけまきも……………(三〇)
 足引の……………(三〇)
 朝づく日……………(三一)
 定めにし……………(三一)
 さま〜に……………(三二)
 さし登る朝日のごとく……………(三二)

妨ぐる……………(九四)
 柿葉に……………(九四)
 さざれ石の……………(九五)
 さし登る朝日のかけを……………(九五)
 さ〜やかに……………(九六)
 さ〜れさへ……………(九六)
 さみだれに……………(九七)
 さゆる夜の……………(九七)
 桐火桶……………(九八)
 消えのこる……………(九八)
 雪晴れて……………(九九)
 雪にたへ……………(九九)
 雪の上に……………(九九)

弓矢もて……………(三六)
 夢さめて……………(三六)
 行く水は……………(三七)
 夕づく日……………(三七)
 眼に見えぬ神の心に……………(三八)
 眼に見えぬ神に向ひて……………(三八)
 身にはよし……………(三九)
 みなと江に……………(三九)
 水無月の……………(四〇)
 白雲のよそに求むな……………(四〇)
 白露のおきふし毎に……………(四一)
 しづの男が……………(四一)
 しづがすむ……………(四二)

白雲のめぐり〜て……………(四六)
 しるべする人なかりせば……………(四六)
 しるべする人をうれしく……………(四七)
 白玉を……………(四七)
 暫くは……………(四八)
 慕はしと……………(四八)
 しきしまの大和心の……………(四九)
 靜かにも……………(四九)
 しきしまの大和島根の……………(五〇)
 汐風を……………(五〇)
 白露の風にこぼる〜……………(五一)
 霜がれの……………(五一)
 しづが屋の……………(五二)

ひ 獨り立つ……………(三五)

久しくも……………(六〇)

人はたゞ……………(八四)

久方の……………(一〇六)

廣き世に……………(一二三)

開け行く道に出でても……………(一二五)

開け行く時にいよく……………(一二九)

人皆の……………(一三四)

日に添へて……………(一九三)

も 物の學ぶ……………(一九九)

もろともに……………(二三)

す 進みたる……………(二六)

すくやかに……………(三九)

進むべき……………(七一)

すなほなる……………(一〇一)

未遂に……………(一五六)

涼しくも……………(一〇六)

明治天皇御製謹註

巨理章三郎謹解

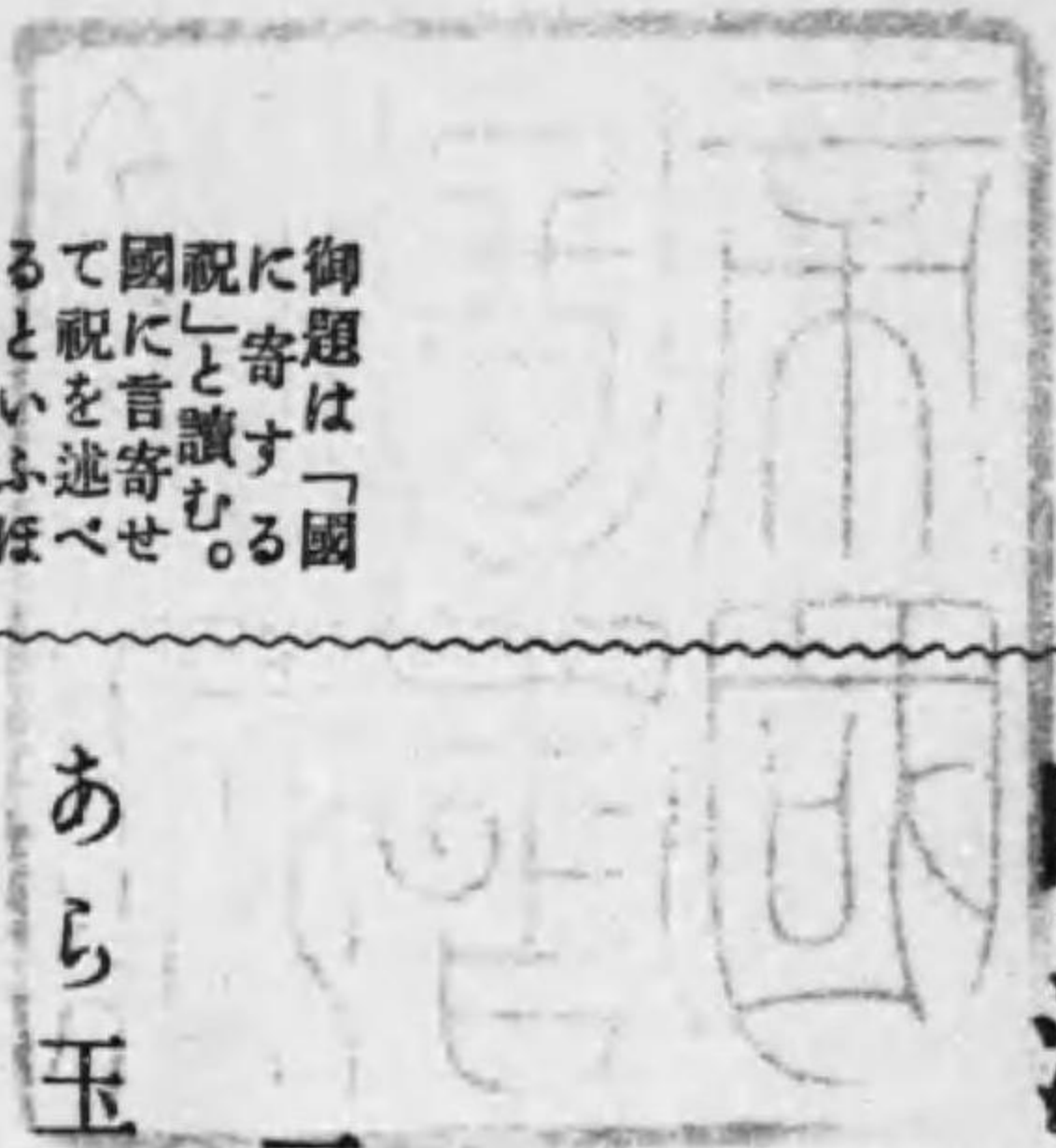
寄國祝

あら玉の年を迎へてよろづ民一つ

心に國祝ふらし

【語釋】「あら玉の」年の枕詞。「よろづ民」萬民で、多くの民

御題は「國に寄する」と讀む。祝に言寄せるに言寄せるを述べるといふほど。明治二年の御製である。



といふ意、此處では全國民。「祝ふらし」祝ふであらう、「らし」は推量の助動詞。

【通釋】新しい年を迎へて、國民はだれもく皆同じ心で、我が國の榮え行くことを、祝うて居ることであらう。

二 寄道祝

葦原の 瑞穂の國の 萬代も みだれぬ
道は 神ぞ開きし

【語釋】「葦原の瑞穂の國」日本國の稱、葦が到る處に茂つて居て、稻穂がよく實のる國といふ意である。「みだれぬ

道は」道は廣くは道義といふ意であるが、此處では特に我が國の君臣の分、又は國家の秩序と解するがよいとおもはれる。「開きし」開いた。

【通釋】我が日本の國の、幾千萬年の後までも、亂れることのない、尊い國家の道、即ち大義名分は、神がその初めをお開きになつたのである。

三

樞原の 遠つ皇祖の 宮柱 立て初めし
より 國は動かず

【語釋】「橿原の遠つ皇祖」單に皇祖といへば、幾通りにも解せられるが、此處では神武天皇の御事である。「宮柱立て初めしより」初めて宮殿を御造りになつてからの意で、即ち皇業を御創めになつてからといふことである。

【通釋】神武天皇が大和に橿原の宮を御造りになり、皇位に御即きになつてからこの方、我が國の基は少しも動くことがない。

四

いその上 古きためしを たづねつゝ

新しき世の 事も定めむ

【語釋】「いその上」古の枕詞。「たづねつゝ」たづね求めることとて、此處では考へ合せながらといふ程の意である。

【通釋】古の歴史に前例をたづね求めて、それを考へ合せながら、新らしく進んで行く世の、政治其の他萬端のことをも定めよう。

五 社頭松

常磐なる 松こそ立てれ 動きなき 國
を鎮めの 神の社に

御題は社頭
の松とほ
む。社に
と。松に
松と。い
意。明治
十一年
會始の御
で。ある。

【語釋】

「常磐なる」常磐は何時も變りなきこと。「國を鎮めの」國を鎮め守つて居る所の。

【通釋】

何時も變りなく、緑の色をたゞへてゐる松が、永久に變り動くことのない我が國を、鎮め守つて居られる神の社に、神々しく立ち茂つて居る。

六

吾が心 及ばぬ國の はてまでも 夜ひ
る神は 護りますすらむ

【通釋】

我が心の十分にとどきかねる國のはての方までも、

神は夜ひる守つて居られることであらう。

七 巖 上 松

苔むせる 岩根の松の よろづ代も 動
きなき世は 神ぞ守るらむ

【語釋】

「岩根」岩の根本といふ意味もあるが、此處では單に岩とか、いはほとかいふ意である。

【通釋】

苔の生えた巖の上に立ち榮えて居る松のやうに、よろづ代までも變ることのない我が世をは、神が守つて下さることであらう。

明治二十六年
御製
の歌
始

八 寄 國 祝

八

定めにし 其の初より あし原の 國の
榮えは 神ぞ護るらむ

【語釋】「定めにし」國の基を定めたその初めからの意。

【通釋】我が日本の基を定めた其の初めの時から、國の榮え
るといふことについては、神がまもつて居て下さるの
であらう。

九

神代より うけし寶を まもりにて 治
め來にけり 日の本つ國

【語釋】「神代より受けし寶」三種の神器をさす。

【通釋】神代より受け傳へて來た神器をば、皇位のまもりと
して、我が日の本の國をば、治めて來たことである。

一〇

國民の 一つ心に 仕ふるも 皇祖の神
の 御惠みにして

【通釋】かく國民が一つ心になつて仕へるのも、皇祖の神の

御惠によることである。

一一 懐 舊

折りくゝに 思ひぞ出づる 國のため
心碎きし 人の昔を

【語釋】「折りくゝに」折につけて。

【通釋】 其の折りくゝにつけて、國のために心を碎いて盡して呉れた人人の昔のことが、思ひ出されることである。

一二 庭 訓

たらちねの 庭の訓へは 狭けれど 廣
き世に立つ 基とはなれ

【語釋】「たらちねの」親の枕詞、又親をもさす、此處では後の意である。「庭の訓へ」家庭の教訓。

【通釋】 家庭で行ふ親の教訓は狭いけれども、廣い世に立つについての基となるものである。

一三

若竹の おひ行く末を 思ふ世に 庭の
訓を おろそかにすな

この教育の御草製には
たゞとれへて草製には
ぜられへて草製には
のふれへて草製には
いふ多例はかたも詠
るに多例はかたも詠

【語釋】

「若竹の」子供にたとへて仰せられたのである。「世に」世であるからの意。世は若竹のよ(節と節と間、又は節の稱)と縁語になつてゐる。

一一一

【通釋】

子供の成長して行く先きくを思ふのが世の人情であるから、家庭の教訓をおろそかにしてはならぬ。

一四

いつくしと めでのあまりに 撫子の
庭の訓へを ゆるがせにすな

【語釋】「いつくし」可愛い。「撫子」子供にたとへていふ。

【通釋】

可愛いよからといつて、あまり愛しすぎて、家庭の教訓をゆるがせにしてはならぬ。

一五

天さかる ひなのはてまで しげらせむ
我がしき島の 道教へ草

【語釋】

「天さかる」ひなの枕詞。「ひな」田舎のこと。「しき島」我が日本の稱。「教へ草」教育のこと。

【通釋】

田舎のはての方までも、我が日本の道を傳へる國民の教育を、盛に行き渡らせたいものである。

一三

御題は草に
寄する述懐
と讀む。草
に言寄せて
おもひを述
べる意。

一六 寄草述懐

むら肝の心をたねの 教へ草 生ひし
げらせむ 大和島根に

【語釋】「むら肝の」心の枕詞。「大和島根」日本をさす。

【通釋】「國民の心を種子として、これを育て、行く教育をば、我が國內に、盛に行き渡らせたいものである。」

一七 教 育

ともすれば あらぬ方にと ふみ迷ひ

教へ難きは 人の道なり

【語釋】「あらぬ方」思はぬ方。又とんでもない方。

【通釋】やゝともすれば、とんでもない方向に迷ひこんでしまつて、人の踐み行ふべき道といふものは、誠に教へにくいものである。

一八 寄道述懐

白雲の よそに求むな 世の人の まこ
との道ぞ 敷島の道

【語釋】「白雲の」よそといふための序詞。「敷島の道」敷島の

別著「教育
勅語」と御
製「御製の
此の御製の
か解は一本
たからしめ
る。

大和歌の道の略、和歌の道。

【通釋】 歌道を修めるには、人々のまごゝろをいひあらはせばよい、何もわざわざこれを他の方面に求めるには及ばぬことである。

一九 教 育

進みたる 世に生れたる うなるにも
昔の事を 先づ教へなむ

【語釋】 「うなる」 幼い子供。「教へなむ」 教へよう、なむは願望の意をあらはす。

【通釋】 文明の進んだ世の中に生れた子供等に對しても、第一に昔の事柄をよく教へたいものである。

二〇 教 育

いさがある 人を教への 親にして お
ほし立てなむ 大和撫子

【語釋】 「教への親」 教師のこと、生みの親に對していふ。「おほし立てなむ」 育て上げよう。

【通釋】 國家に勳功のある人をば教への親として、我が國の子供等を育て上げて行かう。

乃木希典に
學習院長に
御任命の
つた頃
製と承は
る。

一一一 述 懐

千萬の民の心も をさまらむ 誠一つ
を以て教へなば

【通釋】 幾千萬人の國民の心も、誠といふことを專一として
教へたならば、よくをさまることであらう。

一一二

世の人を 教ふることも 難からむ 身
の行ひの 正しからずば

【通釋】 我が身の行ひが正しくないならば、世の人を教へる
といふことも困難であらう。

一一三

千萬の民と共に 樂むに ます樂は
あらじとぞ思ふ

【通釋】 幾千萬人の國民と共に樂む所の、その樂みにまさ
る樂みはあるまいと思ふ。

一一四

白露の おきふし毎に 思ふかな 民の
草葉の 榮行かむ世を

【語釋】「白露の」おきといふための序詞、おきは置きと起き
とにかゝつてゐる縁語。「民の草葉」民草青人草などゝ
もいひ、生々して榮え行く多數の人民といふことで、
億兆の人民といふのと同じである。

【通釋】 寝ても起きてても、どうぞ億兆の國民が皆榮えて行く
やうにと、ひたすらおもひ願ふことである。

此の春は 梅鶯も 忘れけり 民安かれ
と 思ふばかりに

【通釋】 此年の春は梅や鶯のことも忘れてゐたわい、國民が
安らかであるやうにと、そればかりを心に願つてゐた
ので。

事なくて 治まる世にも 民の爲 思ふ
心は 休むときなし

【通釋】 世の中が無事に治まつてゐる時でも、國民のために

明治四十三年
三月十三日
開始
御製
の
歌
ある

と思ふ我が心は、暫しの間もやすむことがない。

三二

二七 新年雪

田に畑に 雪ぞつもれる 民の爲 ゆた
かにと思ふ 年の始に

【通釋】 どうぞ今年も豊年であつてほしいと、國民の爲に願つてゐる年の始めに當つて、古來豊年の前兆といふ所の雪が、田にも畑にも一面に降り積つたことである。

二八

照るにつけ くもるにつけて 思ふかな
我が民草の上はいかにと

【通釋】 日が照るにつけても曇るにつけても、我が國民はど
うであらうかと、常に思ひの絶えないことである。

二九

雨に思ひ 風に心を 碎くかな 民の手
わざの たゞやすかれと

【通釋】 雨が降るにつけても風が吹くにつけても、どうぞ國
民の生業が安全であるやうにと、たゞ其の事に思ひを

三三

つくすことである。

三〇

國民の上も心に まかせぬは 雨と嵐
の うれひなりけり

【通釋】 國民の上につけても、自分の思ふやうにならないのは、雨と嵐の災難についての心配である。

三一 藥

へだてなく かくる恵みの 露こそは

青人草アヲヒトクサの 藥クサなりけれ

【通釋】 すべてのものにわけへだてなく、あまねく施すところの恵みの露こそ、國民の藥ともいふべきである。

三二 夏 市

立ち續く 市の家居イヘは 暑アツクからむ 風の
吹き入る 窓マダラせばくして

【語釋】 「市」町のこと。「せばくして」せまくての意。

【通釋】 家のたちつゞいて居る町の住ひは、風の吹き込む窓もせまいことであるから、さぞ暑いことであらう。

三三三

小山田の 里の烟も 年々に 立ち添ふ
世こそ 樂しかりけれ

【語釋】「立ち添ふ」烟の立ちまさること、榮えて行くといふ意。「小山田の里」田舎の村里をいふ。

【通釋】田舎の村里も年毎に榮えて行く、その世こそまことに楽しいことである。

三四

縣守^{アガタ} 心づくしの 程見えて わら屋の
烟 立ちまさりけり

【語釋】「縣守」地方の役人のこと。「心づくしの程」骨折りの結果といふ程の意。

【通釋】地方の役人が心を盡して呉れるその骨折りの結果があらはれて、村の家々も次第に榮えて行くことである。

三五 月不選所

萩の戸の 露にやどれる 月影は しづ
が垣根も 隔てざるらむ

御題は「月
所を讀むば
ず」と讀む。
月が如何な
る所をも平
等に照すと
いふ意。

一本には萩の戸の花に云々とある。

御題は月にして自ら對して言ふの志を意あふる。

【語釋】「萩の戸」清涼殿にある御局の名。もと其の前庭に萩が植ゑてあつたので名づけられたといふ。こゝでは廣く宮中の御庭といふ程の意に解してよからう。「しづ」一般多數の人民といふ意。

【通釋】宮中の御庭の萩の露に宿つて居る月の光は、多數の人民の住んで居るあばらやの垣根をも、わけへだてなく照らしてゐることであらう。

三六 月前言志

我が心に 到らぬ限の なくもがな 此の世を照す 月の如くに

【語釋】「なくもがな」ないやうにありたい。がなは願望の意をあらはす。

【通釋】此の世のすみずみまでも、残るところのなく照す月のやうに、自分の心を行きとどかせたいものである。

三七 車 上 雪

しづの男が ひとり引き行く。 小車の 重荷の上に つもる雪かな

【語釋】「小車」小は添詞で車といふ意。

【通釋】しづの男が一人で引いて行くあの車の重荷の上に、

雪が積つてゐることである。(さうでなくても積荷が重いのに、さぞ苦しいことであらう。)

三八 夏 車

重荷引く 車の音ぞ 聞えける 照る日
の暑さ たへ難き日に

【通釋】 照る日の暑さのたへ難い此の夏の日に、重荷を引いて行く車の音が聞える。さぞ暑いことであらう。

三九

しづがすむ わらやの様を 見てぞ思ふ
雨風あらしき 時は如何にと

【通釋】 貧しい人の住んでゐるわら屋の様子を見ると、雨風のあらい時はどうであらうかとそれが心配に思はれる。

四〇

冬深き ねやの衾フスマを 重ねても 思ふは
しづが 夜寒なりけり

【語釋】 「衾」 夜具のこと。

【通釋】 冬の最中、自分は寢床の夜具を暖に重ねて居ても、

御題は社に
詣てて世を
祈る意。

心にかかるのは、貧しい人々の夜寒の様である。

三二

四一 社頭祈世

とこしへに 民安かれと 祈るなる 我
が世を守れ 伊勢の大神

【通釋】 永久に國民が安らかであるやうにと祈つて居る我が世を守り給へ伊勢の大神よ。

四二

罪あらば 我れをつみせよ 天つ神 民

は我が身の 生みし子なれば

【語釋】 「天つ神」 天の神。

【通釋】 天つ神よ、國民はすべて我が身の子であるから、若しも國民に罪があつたならば、その民をば罪せず、我を罪して下され。

四三 雪中鶴

雪晴れて 月さし渡る 松原に 子を思
ふ田鶴の 聲の聞ゆる

【通釋】 雪空が晴れて、月の光のさし渡つて居る松原に、子

三三

の身の上を氣づかつてゐる鶴の聲が聞える。

四四 鶴 思 子

前になり 後ウツロになりて 雛まもる 田 鶴
の心の あはれなるかな

【語釋】「あはれ」何事でも深く身にしみた感じをあらはす語。こゝではしほらしいといふほどの意。

【通釋】前になつたり後になつたりして、雛を守つてゐる鶴の心といふものは、誠に感すべきものである。

四五 鳥 思 子

子を思ふ 夜半の鳥の いねがねに 明
くる遅しと 啼き渡るらむ

【語釋】「いねがねに」ねることが出来ないで。「啼き渡る」啼き通す。

【通釋】時は夜半であるけれども、親鳥は子の身を思つてねられないで、明けるのが遅いと、夜通し啼いてゐるのじであらう。

四六

獨り立つ 身となりし子を 幼しと 思

ふや親の心なるらむ

三六

【語釋】「獨り立つ身」一人前となつた身。

【通釋】一人前の身となつた子を、まだ幼ないと思つて色々心配するのが、親心であらう。

四七

たらちねの親の教を守る子は學の道もまどはざるらむ

【通釋】親の教を守る子供は、學問の道にもまどはないであらう。

四八

たらちねの親の心は誰も皆年ふるまゝに思ひ知るらむ

【語釋】「年ふる」年のたつこと。

【通釋】親の心といふものは、誰でも年少の時は、なかくわからないが、年を取るに従つて、次第にわかつて來るであらう。

四九

三七

たらちねの み親の教 あら玉の 年ふ
るまゝに 身にぞしみける

【通釋】 我がみ親の教は、年を取るに従つて、益々深く身に
しみることである。

五〇 親

むら肝の 心つくして 報いなむ おほ
し立てたる 親の恵みに

【語釋】 「報いなむ」 報いよう。

【通釋】 我が身を育て上げて下された親の恵みに對しては、

心を盡して之に報いよう。

五一

すくやかに 家をも身をも 修めつゝ
老いたる親の 心やすめよ

【語釋】 「すくやかに」 健全に、身の健全と家の健全とにかゝ
つてゐる。

【通釋】 健全に家をも齊へ身をも修めて、年老いた親を安心
させよ。

五二

たらちねの 親の心を 慰めよ 國につ
とむる いとまある日は

【通釋】 國家に仕へて忙しい任務についてゐても、少しでも
暇のある時には、親の心を慰めるやうにせよ。

五三 齊 家

親も子も したしみ交はし 家の内の
にぎはへるこそ 世は樂しけれ

【通釋】 親も子も親みあうて、一家の内がいつもにぎはつて
居るといふことは、誠に樂しいものである。

五四 思 往 事

たらちねの みおやの御代も しら雲の
四十路のよそに なりにけるかな

【語釋】 「しら雲の」よそといはんための序詞、よそは四十と
餘所ヨソとにかゝる。

【通釋】 父みかど孝明天皇のしろしめされた大御代も、思へ
ばはや四十年の昔となつたことである。

五五 故 郷 橘

御題は故郷の橘であ
る。故郷といふのは、
昔て足をはいて、
をばすべた所を
いふのであ
る。此處で
は京都の御
所をさし、
たことと
祭する。

たらちねの 御親の御代の 舊事を 思
ひぞ出る 庭の橘

【語釋】「橘」柑橘類をいふ、橘の香をかけば昔の事を思ひ出
すといふことは、古くから歌にもよみ文にも書いてあ
る。

【通釋】 父みかどの御代の昔のことが、庭の橘を見るにつけ
ても何かと思ひ出される。

五六 夢

たらちねの 親の御前に ありと見し

夢の惜しくも さめにけるかな

【通釋】 親の御前に居ると見たその楽しい夢が、心惜しくも
さめたことである。

五七 兄 弟

千代呼ばふ 聲ぞにぎはふ 山松の 連
なる枝の ひろき園生は

【語釋】「呼ばふ」呼ぶの延言、千代までもと呼ぶといふ意。
「園生」園といふに同じ。「山松」山には強い意味なし。

【通釋】 松の枝の連つてゐる廣い園には、千代までもと互に

呼びかはす聲が、にぎはつてゐることである。

四四

五八

正しくも 生ひしげらせよ 教へ草 男
女の 道をわかちて

【通釋】 男と女との踐み行ふべき道を明かに區別して、正しい教育を盛んに施すやうにせよ。

五九

おもふこと 思ひ定めて 後にこそ 人

にもかくと 言ふべかりけれ

【通釋】 自分の心に思ひ浮んだことは、しかと考へ定めた上で、人にもさうと話すべきものである。決してかるはづみに言ひちらすべきものではない。

六〇 旅行友

及ばぬを 助け合ひつゝ 思ふ友 同じ
學びの 旅に出づらむ

【通釋】 親しい友といふものは、その足りない所を互に助け合ひながら、共に志して居る學びの道に旅立つことで

四五

あらう。

六一 友

過を 諫めかはして 親しむが まこと
の友の心なるらむ

【通釋】 互に過を諫めあうて親しんで行くのが、本當の友として
の心であらう。

六二

過を 諫めかはして 國の爲 力をつく

せ ますらをの友

【語釋】 「ますらをの友」 男子達よといふ程の意。

【通釋】 互に過を諫め合うて、國の爲に力をつくすやうにせよ、
男子等よ。

六三

つねに身の 養ひ草を つみてこそ 人
の齡は 延ぶべかりけれ

【語釋】 「養ひ草をつむ」 養生をすること。

【通釋】 常に注意をして、養生を怠らなければこそ、人の齡と

いふものは、延ばすことが出来るのである。

六四 心静延壽

むら肝の 心を廣く 養はゞ 長き齡も
保たざらめや

【語釋】「保たざらめや」保たないであらうか。

【通釋】 心を廣くゆつたりと持つやうに修養したならば、長いきをすることも出来ないといふことはないであらう。

六五

及ばざる 事なおもひそ 空蟬の 身は
程々の ありけるものを

【語釋】「空蟬の」身の枕詞。「事なおもひそ」事を思ふな。

【通釋】 自分の身にすぎたことをば思ふなよ、身にはそれぞれ程合といふものがあるから。

六六

何事も おもふがまゝに ならざるが
却りて人の 身の爲にこそ

【語釋】「身の爲にこそ」身の爲にこそあれの略。

【通釋】 何事も自分の思ふ通りにならないのが、却て人の身のためになるものである。

六七 心

おもふには 任かせずとても ひと心
平かにこそ あらまほしけれ

【語釋】 「あらまほし」 ありたい。

【通釋】 物事が自分の思ふ通りにならないからといつても、

人の心といふものはいつも平かにありたいものである。

六八 車

覆る こともこそあれ 小車の すゝむ
にのみは まかせざらなむ

【通釋】 車の進みがよいからとて、其のまゝに任せておくと

覆ることもあるから、注意の上にも注意がありがたいものである。

六九

駒に乗る わざ如何ばかり 進むとも
躓くことを 顧みよかし

【通釋】 馬に乗る術がどれほど上手になつても、その躓くこ

とがあるといふことを、心にとめてをれよ。

七〇

おもふ事 おもふがまゝに なれりとも
身を慎まむ ことを忘るな

【通釋】 自分の思ふ通りに事がなつたからといつて、身の行
を慎むことを忘れるなよ。

七一

拂はずは おもはぬ方に 傾かむ 露お

きあまる 撫子の花

【通釋】 露の餘分に宿つて居る撫子の花は、それを拂ひ除か
ないと、思ひもよらぬ方に傾くであらう。

七二 塵

ともすれば 浮き立ち易き 世の人の
心の塵を いかで拂はむ

【語釋】 「心の塵」 心の浮き立ち易いのを、塵にたとへて仰せ
られたのである。

【通釋】 やゝともすれば浮き立ち易い世の人の心を、どうす

れば拂ひのけることが出来るであらうか。

五四

七三 夏 人事

窓の内に 扇とりても 暑き日に 照る
日をうけて 小草刈る見ゆ

【通釋】 部屋の内居て扇をつかつてゐても暑い此の夏の日
に、照りつける日の光をあびながら、草を刈つて居る
者が見える。さぞく暑いことであらう。

七四 仁

國の爲 仇なす敵は くだくとも いつ
くしむべき 事な忘れそ

【通釋】 國のために、我に仇をする敵をばうちくだいても、
之れをいつくしむといふことを忘れてはならぬ。

七五

さまざまに 重荷を積みて 日に焼けし
砂の上を 車ひくなり

【通釋】 いろくくと重い荷物を積んで、日に焼けたあの熱い
砂の上を、車を引いて居ることである。

五五

七六 向爐火

桐火桶 カキヒツ かき撫でながら 思ふ哉 カガヤ 隙間 スキマ
多かる しづが伏屋 フセヤ を

【語釋】「桐火桶」桐の火鉢。「多かる」多くある。「伏屋」あばらや。

【通釋】 桐の火鉢をかきなで、あたゝまりながらも、寒風のとほる隙間が多い、あばらやにすんでゐる者の、身の上を思ひやることである。

七七 老人

老の波 潜 カクレ るにつけて 思ふかな 浮き
つ沈みつ 渡り來し世を

【語釋】「老の波」年の老ゆるをいふ、年のことを年の波ともいふ。「潜る」「浮きつ沈みつ」何れも波の縁語である。

「浮きつ沈みつ」浮いたり沈んだり。

【通釋】 年一年と年をとつて行くにつけても、今まで種々の境遇を経て來た世の様を、しみぐと思ひ出すことである。

七八 老人

つく杖に すがるともよし 老人の 千
年の坂を 越えよぞと思ふ

【語釋】「よし」よしや、たとひ。

【通釋】よしや、杖にすがつてなりとも、千年の坂を越えて、
一層の長命をするやうにと、老人の身の上に就いて思
ふことである。

七九

四方の海 皆はらからと 思ふ世に な
ど波風の 立ち騒ぐらむ

【語釋】「四方の海」世界。「波風」戦争などをさす。

【通釋】四海皆兄弟と思つて居る此の世界に、どうして騒が
しい事件が起るのであらう。

八〇

打乗りて 雪の下道 はしらせし 手馴
れの駒も 老にけるかな

【語釋】「雪の下道」雪の降り積つてゐる道。「手馴れの駒」手
なづけた馬。

【通釋】打乗つて雪の積つて居る道をはしらせたこともある

手なづいた馬も、はや年老いてしまつたことである。

八一

久しくも 我が飼ふ駒の 老行くを 惜
むは人に かはらざりけり

【通釋】 永い間飼うて居る駒が老い行くのを惜む心は、人の老い行くを惜む情と變りはない。

八二

戦の いとまある日は いくさ人 手馴

の駒を いつくしむらむ

【通釋】 戦争の暇のある日には、軍人は飼ひならした馬をいつくしんで居ることであらう。

八三

暑しとも いはれざりけり 煮えかへる
水田に立てる しづを思へば

【通釋】 煮えかへるやうに暑い水田の中に立ち働いて居る農人の身の上を思ふと、自分は暑いなどといつて居られない。

八四

世の中に ひとり立つまで 修め得し
業こそ人の 寶なりけれ

【通釋】 世の中に獨立して行けるまでに修め得た學業といふものは、誠に人の寶である。

八五 手 習

竹馬に 心の乗りて 手習に 怠りし日
を 今思ふかな

【通釋】 竹馬に心が乗り移つてしまつて遊びごとに耽り、手習を怠つた昔のことが、今となつては残念に思はれることである。

八六 書

上つ代の 事をつばらに しろしたる
書をしろべに 世を治めまし

【語釋】 「つばらに」 詳に、くはしく。「治めまし」 治めよう。「しろべ」 案内。

【通釋】 昔の世のことをば、くはしく書きしるした書物を案

内として、今のこの世を治めて行かう。

八七 讀 書

今の世に 思ひくらべて いその上 ふ
りにし書を 讀むぞ樂しき

【通釋】 今の世に考へ合せながら、古い昔の書物を讀むことは、誠に楽しいことである。

八八

白雲の めぐりくゝて さまざまの 國

この御製は外國の視察などに行かせる者などを送らうと給へるもの

の姿を 見てかへらなむ

【通釋】 あの空なる白雲のやうに、めぐりめぐつて、世界の色々な國の様子を見てかへつて來よ。

八九

よきを取り 悪しきを捨て、 外國に
劣らぬ國と なすよしもがな

【語釋】 「よし」でだて。

【通釋】 彼の善い所をば取り、悪い所をば捨て、何れの外國にも劣らない立派な國に、どうかして、したいもの

此の御製は
必ずしも草
木だけをさ
さされたの
ないことは
ないことと
明かすこと
とおもはれ
る。

である。

九〇 植物苑

我が苑に 茂りあひけり 外國の 草木
の苗も おほし立つれば

【通釋】 外國の草木の苗でも、育て上げれば、我が苑に茂りあうて居ることである。

九一

しるべする 人なかりせば 如何にして

我が志す 道に入るべき

【通釋】 先に立つて、案内をして呉れる人が、なかつたならば、どうして自分の目的とする道に、進み入ることが出来るであらうか。

九二

しるべする 人をうれしく 見出でけり
我が言の葉の 道の行く手に

【語釋】 「言の葉の道」和歌の道。

【通釋】 和歌の道を修めて行かうとするその行き向ふ處にあ

たつて、うれしくも我が指導者を見出したことである。

九三

杖つきて 道行くまでに 老いし身も
昔尋ぬる 葉とぞなる

【語釋】「葉」道案内。

【通釋】杖をついて、道を歩くまでに、年をとつた老人も、昔のことを尋ねる道案内とはなるぞ。

九四 披書知昔

御題は書物を
披き見えて
昔の事柄を
知るの意。

あらはし、書を教と なしにけり 昔
の人の 聲はきかねど

【語釋】「あらはし、書」古人の著した書物。

【通釋】古人に就いて、直接に教へは受けないけれども、その著した書物を我が身の教へとしてゐることである。

九五

もの學ぶ 道に立つ子よ 懈に まされ
る仇は なしと知らなむ

【通釋】學問の道に、たづさはつてゐる少年等よ、懈りとい

ふものにすぎた仇はないといふことを、よくわきまへて居つてほしいものである。

九六

幼子が 物かく跡を 見ても知れ 習へば習ふ しるしある世を

【通釋】 幼子が文字を書く出来ばえを見るにつけても、習へば習つただけの、甲斐があるものであるといふことを、知るがよい。

九七

幼子が 習へば習ふ ほど見えて 清くなり行く 水莖のあと

【語釋】 「水莖のあと」筆蹟をいふ。
【通釋】 幼子が習へば習ふだけ、それに相當して、筆蹟が上手になつて行くことである。

九八 書

心なく かきながしたる 水莖の あと
はづかしく 思はるゝかな

【語釋】 「心なく」それとはなしに。

【通釋】 それとはなしに書きながした筆蹟が、我ながらはづかしく思はれることである。

九九 手習

進むべき 筆先しるし 幼子が 手習ふ
文字は 拙ツタナけれども

【語釋】 「しるし」著しい。

【通釋】 幼子が手習をしてゐる文字は、まだまづいけれども、將來進歩すべき様子が、其の筆先に著しくあらはれてゐる。

一〇〇

白玉を 光なしとも 思ふかな 磨シき足
らざる 事を忘れて

【通釋】 まだ磨き方が足りないといふことを忘れて置いて、白玉に光がないと思ふやうなことがあるものである。

一〇一 寄石述懐

雨垂アメりに くぼみし軒の 石見ても 難
き業とて 思ひ捨てめや

【通釋】 ほとくと落ちる雨垂のために、くぼんだ軒の石を

所謂「點滴
穿石」の意
をよませ給
へるものと
拜せられ

見るにつけても、事業が困難だからといって、之れを
思ひ捨てよよからうか。

一〇二 時 計

時計る 器は前に ありながら たゆみ
がちなり 人の心は

【通釋】 時間をはかる時計は前にあるに拘らず、人の心とい
ふものは、兎角たゆみがちなるものである。

一〇三 夏 朝

朝の間に 物學ばなむ 幼子も 晝は暑

さに 倦みはてぬべし

【通釋】 元氣な幼子も、晝になると、暑さのために倦んでし
まふだらうから、朝の涼しい間に、學問をするやうに
したい。

一〇四 學 校

今はとて 學びの道に 怠るな 許しの
ふみを 得たるわらはべ

【語釋】 「許しのふみ」卒業證書。

【通釋】 もう卒業證書を受け取つたからといって、少年たち

は、學問の道に怠りがあつてはならぬぞよ。

一〇五

事しげき 世にふる人も 我が好む 道
にわけ入る 暇はありけり

【語釋】「世にふる」世に處する。

【通釋】 忙がしい世の中の事に、たづさはつてゐる人も、自
分の好む道には、心を入れて研究を進める暇があるも
のである。

一〇六 勉 學

暇なき 身も朝夕に いそしみぬ 思ひ
入りたる 道の爲には

【通釋】 世の務めに暇のない身も、自らこれこそはと思ひ込
んだ道のためには、朝夕熱心に勉めはけんだことであ
る。

一〇七 夕

つかさ人 まかでし後の 夕まぐれ 心
靜に 書を見るかな

【語釋】「つかさ人」役人。「まかでし後」退廳の後。「夕まぐ

れ」夕ぐれ。

【通釋】 役人共が、ひきさがつた後の夕ぐれに、心靜かに、
書物を讀むことである。

一〇八

わけばやと 思ひ入りぬる 道にこそ
高きしをりも 見え初めにけれ

【語釋】 「わけばや」わけ入りたい。

【通釋】 どうかしてわけ入りたいと、思ひこんで入つた此の
道にこそ、行き先の高い目あても、見え初めて來たこ

とである。

一〇九

大空に 聳えて見ゆる 高峰にも 登れ
ば登る 道はありけり

【通釋】 大空に高く聳えて見える峰にでも、登らうとすれば
登ることの出来る道はあるものである。

一一〇 窓前梅

文机の 塵拂はんと 窓の戸を 明くれ
ば梅の 花の香ぞする

【語釋】「文机」學用の机。

【通釋】机の上の塵を取拂はうとして、窓の戸をあけると、其のとたんに、梅の花の香が、芬々^{ふんふん}とにほつて來た。

一一一 竹風涼

文机の上に夜露も かつ散りて 涼しくなりぬ 竹の下風

【語釋】「かつ散りて」「かつ」は軽い意味で、僅かにとか、すこしとかいふほどの意。

【通釋】机の上に、夜露も、はらくとちつて來て、竹の下風が、涼しくなつたことである。

一一二 秋夜長

秋の夜の 長くなるこそ うれしけれ
見る卷々の 數をつくして

【通釋】秋の夜が長くなると、書物の卷數を、次ぎくに讀みつくすことが出来るので、まことに、うれしいことである。

一一三 披書思昔

暫くは 幼心にかへりけり 讀みなら
ひにし 書を披きて

【通釋】 幼い時に、読み習うた書物をひらいて見て、暫くは其の昔の幼心に、かへつたことである。

一一四

古の書見るたびに 思ふかな 己が治むる 國はいかにと

【通釋】 古の書を読む度毎に、之れに鑒みて、自分が今治めて居る此の國はどうであらうと、つくぐと考へ思ふことである。

一一五

おのが身を 修むる道は 學ばなむし
づがなりはひ 暇なくとも

【語釋】 「なりはひ」 生業又は世渡り。

【通釋】 たとへ人々の世渡りのわざが、忙しくて暇がないといつても、せめて自分の身を修める道だけは、學んでほしいものである。

一一六 道

ならび行く 人にはよしや 遅るとも
正しき道を ふみな違へそ

【通釋】 たとへ共に進んで行く人に遅れようととも、正しい道をふみちがへてはならぬぞよ。

一一七 道

世の中に 危きことは なかるべし 正しき道を 踏み違へずば

【通釋】 正しい道をふみちがへないならば、この世の中に、何もあぶないといふことは、ないであらう。

一一八

人はたゞ 誠の道を 守らなむ たかき

いやしき 品はありとも

【語釋】 「品」身分。

【通釋】 たとへその人々の身分に、高下の別はあつても、誰も皆、誠の道を必ず守つてほしいものである。

一一九 人

賢きも 愚もあれど 人毎に あらまほしきは 誠なりけり

【通釋】 人に賢愚のちがひはあるけれども、誰にでもあつてほしいのは、誠といふものである。

一一一〇

千早振る 神の心に かなふらむ 我が
國民の 盡す誠は

【語釋】「千早振る」神の枕詞。

【通釋】我が國民のつくす誠心は、必ず神の御心にもかなふ
ことであらう。

一一一一

眼に見えぬ 神の心に かよふこそ 人
の心の 誠なりけれ

【通釋】眼に見えぬ神の御心にも通ふものは、實に人の心の
誠である。

一一一二

鬼神も 泣かするものは 世の中の 人
の心の 誠なりけり

【語釋】「鬼神」單に神といふのと、同じ意義に解すべきもの
とおもはれる。

【通釋】神の心に感じて、其の神を泣かすといふほどの力が
あるものは、實に人の心の誠である。

一一三三 誠

眼に見えぬ 神に向ひて はぢざるは
人の心の 誠なりけり

【通釋】 眼にも見えない神の御前に立つて、一點恥づることのないのは、人の心の誠といふものである。

一一二四

言の葉の 誠の道を 月花の もてあそ
びとは 思はざらなむ

【通釋】 心の中のまことを言ひあらはす歌の道をば、月や花のもてあそびごとく思はないやうにしたいものである。

一一二五 歌

天地を 動かすばかり 言の葉の まこと
との道を きはめてしかな

【通釋】 天地を動かすほどの力あるものとなるまで、まことを言ひあらはす和歌の道を、きはめたいものである。

一一二六 鏡

國といふ 國の鑑と なるばかり 磨け

ますらをを やまとだましひ

【通釋】 世界萬國の手本となるほどに、わがやまとだましひを磨いて呉れよ、をのこらよ。

一二七

山を抜く 人の力も しきしまの 大和心ぞ 基なるべき

【通釋】 山をもひき抜くやうな偉大な人の力も、我がやまと心が、基となつてあらはれて來るのであらう。

一二八

くろがねの 的射し人も あるものを 貫き通せ 大和心を

【語釋】 「くろがねの的射し人」日本書紀によると、仁徳天皇の十二年に、高麗から鐵の盾と鐵の的とを獻じた。天皇は群臣百僚に命じて、其の的を射しめられたが、誰も射通す者がなかつた。その時的の臣の祖盾人宿禰が之れを射通したので、イナト的戸田スネノ宿禰の姓を賜はつたといふことである。

【通釋】 鐵の的を射通した人もあるほどであるから、大和心を以つて、どこまでも其の爲すべきことを貫き通せよ。

一二九 天

浅みどり 澄み渡りたる 大空の ひろ
きをおのが 心ともがな

【語釋】「浅みどり」薄いみどり色。

【通釋】薄いみどり色に、一面に澄み渡つて居るあの洪大無邊な天空のやうに、自分の心をもちたいものである。

一三〇

さし登る 朝日のごとく さわやかに
もたまほしきは 心なりけり

【語釋】「さわやか」あきらかに、氣もちよくさえぐとしてゐること。

【通釋】東の空に、さしのほる朝日のやうに、あきらかに、さえぐと、心を持つて行きたいものである。

一三二

行はむ 時にあたりて 迷ふその 人の
心の 惜しくもあるかな

【通釋】いよく斷行すべき時になつて、迷ひをおこす人のその心といふものは、誠に残念なものである。

妨ぐる 何はありとも 思ひ入る 道に
迷ふな ますらをの友

【通釋】 我れ等大丈夫たるものは、どんなに妨げをするものがあつても、一旦成し遂げようと思ひこんだ道に、迷うてはならぬぞよ。

一三三 柱

まき柱 立てし心を 動かすな 世には
あらしの 吹きすさぶとも

【語釋】 「まき柱」立てるといふための縁語、まき柱は、柱の美稱。

【通釋】 一旦、志を立てたならば、どんな困難に出あふことがあつても、これを動かしてはならぬ。

一三四

岩が根を 切り通しても 川水は 思ふ
ところに 流れ行くらむ

【通釋】 堅いく巖を切り通してでも、川の水は、その思ふ方向にと、流れて行くことであらう。

一三五 雪中松

九六

としぐに 雪をかさねて 老松の 操シラフ
たかくも なりまさりけり

【語釋】「なりまさる」次第に多くなること。

【通釋】 毎年く降り積む雪に耐へて来て、雪にもたわまぬ
老松の操は、次第に高くなつたのである。

一三六

うつには 随ひながら 巖をも 通す
は水の 力なりけり

【通釋】「方圓の器に従ふ」といふすなほな性質を持ちながら、
巖をも通す強い力のあるのは、水の力である。

一三七

雪にたへ 嵐にたへし 後にこそ 松の
位も 高く見えけれ

【語釋】「位」品格。

【通釋】 雪や嵐に耐へて、之を凌いで後に、始めて、松の品
格といふものも、高くなつて來ることである。

一三八

九七

易くして なし得難きは 世の中の 人の人たる 行にして

【語釋】「人の人たる行」人として當然行ふべき道。

【通釋】 たやすいことであつて、しかも完全に成就することのむづかしいのは、世の中の人の人たる行である。

一三九 心

ともすれば かき濁しけり 山水の すませばすます 人の心を

【語釋】「すませばすます」すませばすますことの出来るの意。

「山水の」濁す、すますの縁語。

【通釋】 何時も清らかに澄ませておかうとすれば、さうすることの出来る心を、どうかすると、かき濁してしまふものである。

一四〇

柳葉に かけし鏡を かゞみにて 人も心を みかけとぞ思ふ

【語釋】「かゞみにて」手本として。

【通釋】 神前の柳にかけてある、神々しい、清らかな鏡を手本として、人もその心をみかけよと思ふことである。

一四一 鏡

打ち向ふ たびに心を みがけとや 鏡
は神の つくりそめけむ

【通釋】 打ち向ふ其の度毎に、淨潔な鏡の姿を手本として、己れの心をみがけよとて、神が鏡をつくり初められたのであらうか。

一四二

われと我が 心をりく 省みよ 知ら
ずくも まよふことあり

【語釋】 「われと我が」 自分で自分の。

【通釋】 自分で自分の心を、其の時々にふりかへつて見よ、知らずくも、まよつて居ることのあるものである。

一四三 塵

塵の世に 身はまじるとも 人皆の 心
は常に 拂ひ清めよ

【通釋】 いろくくと汚れの多い、この塵の世の中に、身をおいて居ても、人は皆常に、心につもる塵を拂つて、之れを清らかに持つて術くやうにせよ。

一四四

積りては 拂ふがかたく なりぬべし
塵ばかりなる 事とおもへど

【通釋】 僅かのことだと思つても、それが積り積つて行けば、遂には拂ひのけることが出来なくなるであらう。すこしのことだからといつて、なほざりにしてはならぬ。

一四五

すなほなる 人の心に 吳竹の まがれ
るくせは いつかつきけむ

【語釋】 「吳竹の」 まがれるの序詞。

【通釋】 まつすぐな人の心に、まがつたくせはいつついたことであらう。

一四六

天をうらみ 人を咎むる 事もあらじ
我が過を 思ひ返さば

【通釋】 自分の身の過を思ひ返すならば、自分の意の如くにならぬことがあつても、天をうらんだり、人を咎めたりすることもあるまい。

一四七

よしあしを 人の上には 云ひながら
身を省みる 人なかりけり

【通釋】 他人の身の上をば、彼れ是れと評判しながら、自分の身の善悪を反省する人は、さても少いものである。

一四八

ともすれば 人を遅しと 思ふかな 身
のおこたりは 省みずして

【通釋】 自分自らが怠つてゐるといふことは反省しないで、やゝともすれば、他人のすることが遅いと思ふやうになり易いものである。

一四九 藥

心ある 人の諫めの 言の葉は 病なき
身の 藥なりけり

【通釋】 十分考のある人の、諫めの言葉といふものは、病氣のない者に取つての藥、即ち我が身を修める爲の藥となるものである。

一五〇 新年望山

新しき 年を迎へて 富士の嶺の 高き
姿を 仰ぎ見るかな

【通釋】 新しい年を迎へて、あの富士の峰のけだかい姿を仰ぎ見ることである。

一五一 寄山述懷

久方ヒツガの 空に晴れたる 富士の嶺の 高
きを人の 心ともがな

【語釋】「久方の」空の枕詞。

【通釋】 晴れ渡つた空に、高く聳えてゐる富士の山のけだか

さを、人の心ともしたいものである。

一五二 松

雪の上に 立ちさかえたる 山松の 高
きにならへ 人の心も

【語釋】「立ちさかえたる」高く立ちしけつてゐる。

【通釋】 雲を凌いで高く立ち榮えてゐる山松の、そのけ高さを手本として、人も心を修めて行けよ。

一五三 竹

窓の戸を あけくれ見れど あかれぬは
直^{ナホ}かる竹の 姿なりけり

【語釋】「あけくれ」明け暮れであつて、窓の戸を開くといふのと縁語になつてゐる。「あかれぬほ」あきらめられないのは。「直かる」直くある。

【通釋】 窓の戸をあけて、朝夕に見ても、あくといふことのないのは、まつすぐにのびてゐる竹の姿である。

一五四 夢見故人

慕はしと 思ふ心の 通ひけむ 昔の人

の 夢に見えける

【語釋】「通ひけん」故人に通つたのであらうかの意。

【通釋】 常々慕はしいと思つてゐる心が、通つた爲であらうか、その昔の人が夢にあらはれて見えたことである。

一五五 埋 火

埋^{ウツ}火に 寄りそひてやは 暮らすべき
おもひ起さむ 事もある世に

【語釋】「埋火」火鉢などにいけておく火。

【通釋】 いろくくと考へて、起し爲さうとすることも多い世

の中であるのに、どうして埋火に寄り添うてばかり居て、空しく其の日を暮らすことが出来ようか。

一五六 早 梅

梅の花 さけるを見れば 降る雪に 冬
ごもる身の はづかしきかな

【通釋】 梅の花が寒さを凌いで、早くも咲いて居るのを見ると、雪が降るからといつて、冬ごもりして居る身が、耻かしいことである。

一五七 谷 鶯

奥山の 谷の鶯 出でて啼け 都の梅は
今盛りなり

【通釋】 歌意は明かである。今盛りなりのなりは詠嘆の意をあらはしたものである。

一五八

世の中の 人におくれを 取りぬべし
進まん時に すゝまざりせば

【通釋】 進むべき時に、進んで事をしないならば、世の人々に遅れを取つてしまふであらう。

世の中は たかきいやしき ほどくに
身を盡すこそ 務めなりけれ

【語釋】「身を盡す」滿身の熱誠をこめて事をなすこと、全力をつくすこと。

【通釋】世の中といふものは、身分の高い者も低いものも、それ相當に眞心をこめ、全力を盡して、爲すべきことをするのが、其の人々のつとめである。

花になり 實になる見れば 草も木も
なべて務めの ある世なりけり

【通釋】草や木でさへも、花を咲いたり實を結んだりするのを見ると、此の世の中は、すべてのものに、それぐのなすべき務めがあるものである。

家富みて あかぬ事なき 身なりとも
人の務めを 怠るなゆめ

【語釋】「あかぬ事」不十分なこと。

【通釋】 家が富んで居て、何不足の無い身分の者でも、人と
して爲すべき務めを、少したりとも怠つてはならぬ。

一六二 爐邊述懷

更くる夜の 霜ふむひとも あるものを
火をけにのみや よりあかすべき

【通釋】 夜半の寒い霜をふんで、働いて居るものもあるのに、
どうして、火鉢にばかり、寄りそつて居ることが出来
ようか。

一六三 賤家

假庵カサの かるく作りて しづの男は 到
る處に 身を盡くすらむ

【語釋】 「假庵」かりに作った粗末な小家。

【通釋】 かり小屋をば、ごく手軽に作つて、しづの男は何處
へ行つても、力を盡くして働いてゐることであらう。

一六四 寶

葦原の 國富まさむと 思ふにも 青人
草ぞ 寶なりける

【通釋】 我が日本の國を、富まさうと思ふにつけても、國民

が何よりも大切である。

一一六

一六五

おのがじし 力盡くして 世を富ます
民こそ國の 寶なりけれ

【語釋】「おのがじし」自分めいく。

【通釋】 自分自分が、各々その任務に力を盡して、世を富ませて行く國民こそ、ほんとうに國の寶といふべきものである。

一六六 民戸煙

營みは 其の家々に かはるらむ 立つ
る煙は 一つなれども

【語釋】「營み」家業又は職業。「立つる煙」炊事の煙を立てること生活の意。

【通釋】 どの家からも同じ様に煙が立ちのほつて居るけれども、家々に依つて其の生業は違つて居ることであらう。

一六七

國民の 力の限り 盡くすこそ 我が日
の本の かためなりけれ

一一七

【語釋】「かため」守り。

【通釋】 國民が全力をあけて、各自の務めを盡くすといふことが、それが我が國の固い守りとなるのである。

一六八

笛となり 弓矢となりて 吳竹の 世は
さまざまに かはり行くかな

【語釋】「笛となり弓矢となりて吳竹の」世の序詞、世は節に通じたもので、竹の節の間又は節をよといふ。

【通釋】 竹が笛となつたり、弓矢となつたりするやうに、此

の世の中といふものは様々にかはつて行くことである。

一六九 野

新ばりの 畑も田面も 多けれど ひな
の荒野は なほ廣くして

【語釋】「新ばり」新たに開墾した所。「田面」田といふに同じ。

【通釋】 新たに開墾した畑も田も随分多くあるけれど、田舎の荒野はまだまだ廣く残つてゐることである。

一七〇 草

いぶせしと 思ふ中にも 擇びなば 藥

とならむ 草もこそあれ

【語釋】「いぶせし」うるさいといふほどの意。

【通釋】 どうもうるさいと思ふやうな雜草の中にも、よく擇んで見たならば、藥となるやうなよい草もあることゝおもはれる。

一七一

時計る 器の針も ともすれば 狂ひや
すきは 人の世の中

【通釋】 精密な時計の針でも、どうかすると狂ふことのある

やうに、この世の中の事といふものは、とかく狂ひ易いものである。

一七二

思ふこと 貫かん世を 待つほどの 月
日は長き ものにぞありける

【通釋】 自分の志を達成する時を待つてゐる間の年月といふものは、實に長いものである。

一七三

とる棹の ころろ長くも 漕ぎよせむ

蘆間の小舟 さはりありとも

【語釋】「とる棹の」長くにかゝる詞、船の棹のやうに長くの意。

【通釋】 蘆間の小舟を漕ぎ進めるには、いろくゝとさはりがあつても、心長く忍耐して漕ぎつけるやうにしよう。

一七四

廣き世に 交りながら いかなれば 狭
きは人の 心なるらむ

【通釋】 この廣い世の中に交はつて居りながら、どうして人

の心といふものは、さう狭いのであらうか。

一七五 水

くろがねの 船もたやすく 動かして
強きは水の 力なりけり

【語釋】 「くろがねの船、鐵の船」軍艦などのこと。

【通釋】 大きな重い鐵の船をも、やすく、と浮べて走らせるところを見ると、水の力といふものは弱いやうで、實に強いものである。

一七六 夏 草

空蟬の世に立つほどは夏草の
繁シゲくとも 厭はざらなむ こと

【語釋】「空蟬の」世の枕詞。夏草の、繁シゲくの序詞。

【通釋】此の世の中に立ち行く間は、如何程仕事が多くとも
厭はないで居るやうにしたいものである。

一七七

うつせみの人の心の 懈りに まされ
る仇は あらじとぞ思ふ

【語釋】「うつせみの」人の枕詞。

【通釋】世の中には種々の恐るべき仇があるけれども、心の
おこたるといふものほど、大きな仇はあるまいと思ふ。

一七八

開け行く道に出でて 心せよ 躓く
ことの ある世なりけり

【通釋】何の障りもなく、開けて行く道に出でて注意をせ
よ。此の世の中は、とかく躓くことの多いものである。

一七九

浪風の 静かなる日も 船人は 舵に心

を ゆるさざらなむ

一二六

【通釋】 浪風の靜かな日でも、船人は舵を執ることに、油断をしないように、してほしいものである。

一八〇

燕飛ぶ かげのみ見えて 田植ゑとき
家に人なき 小山田の里

【語釋】 「小山田の里」 山間の片田舎。

【通釋】 田植時は忙しいから、子供や老人までも皆働きに出
てしまつて、小山田の里には、燕の飛び交ふかけの見

える外、人一人残つて居ない。

一八一 述 懷

おのがじし 務めを終へし 後にこそ
花の陰には 立つべかりけれ

【通釋】 花を見て樂むのもよいが、それは各自の任務を爲し
終つた、餘暇にすべきことである。務めをなほざりに
して、遊びを先とするやうなことが、あつてはならぬ。

一八二

むら肝の 心の限り 盡くしてむ 我が

一二七

思ふ事 成るも成らずも

一三八

【通釋】 自分の思ひ立つた事が、成功しようがしまいが、それには心をおかないで、心力の及ぶ限りを盡くすことにしよう。

一八三

おのが身を 顧みずして 人の爲 盡くすや人の 務めなるらむ

【通釋】 自分の身をかへりみないで、人のために盡くすといふのが、人たるものゝ務めであらう。

明治七年
御會始の御
製である。

一八四 迎年言志

祝ふぞよ 仕ふる人も ほどくの 道
にたがはぬ 年の始を

【通釋】 國に仕ふる人々も、皆其の身の程々の道にたがはない、年の始めを祝ふことである。

一八五

朝けぶり 立ちそふ末に 知られけり
民のなりはひ 進み行く世は

一三九

【通釋】 國民の生業の、日に／＼進んで行く世の有様は、家
家のかまどから立ちのぼる朝煙の、賑かになるのを見
ても、知られることである。

一八六 寄山祝

天の下 にぎはふ世こそ 楽しけれ 山
の奥まで 道の開けて

【通釋】 山の奥までも道が開けて、國のはて／＼まで、賑ふ
世といふものは、まことに楽しいものである。

一八七

もろともに 扶^{タスキ}け合ひつゝ 國民の む
つび合ふ世ぞ 樂しかりける

【通釋】 國民が、皆共々にたすけ合ひながら、むつましくし
あつて居る、この世の中は、まことに楽しいことである。

一八八 新年海

あづき弓 八洲の外も 浪風の 靜なる
世の 年立ちにけり

【語釋】 「あづき弓」八洲にかゝる詞、八の音が矢に通うて居
る。

明治二十八年
御製
開始

明治三十一年
御製
開始

【通釋】 我が日本の外の國々までも、皆穩かて、何處にも浪風の立たない、めでたい新年の來たことである。

一八九 寄國祝

歡^{ヨロコ}びを いひかはしつゝ、國々の 治まる時に あふぞうれしき

【通釋】 世界の國々が、互によるこびを、いひあひながら、何れも、穩かに治まつて行く、めでたい時にあうたことは、誠にうれしい。

一九〇 四海清

明治十六年
御會始の
歌御製である

沖つ浪 よりくる船も 年々に 數そふ
世こそ 樂しかりけれ

【語釋】 「沖つ浪」よりくるにかゝる詞。

【通釋】 諸國から集まつて來る船も、年毎に其の數をまして行くこの世は、まことに樂しいことである。

一九一

いかに世は 開けゆくとも 古の 國のおきては たがへざらなむ

【通釋】 どんなに世の中が開けて行つても、古からの國のお

きては、たがへないやうにしよう。

一三四

一九二行

世の中の 人のつかさと なる人の 身
の行ひよ 正しからなむ

【語釋】「人のつかさ」人々を治めて行く役人。

【通釋】人々の上に立つて、之を治める役人ともなる人は、先づその身の行ひを、正しくしてほしいものである。

一九三

しきしまの 大和心の 雄々しさは 事

ある時ぞ あらはれにける

【語釋】「しきしまの」大和の枕詞。「事ある時」國家に何か大事の起つた時。

【通釋】我が大和心の勇ましさといふものは、國家に大事のある時毎に、あらはれることである。

一九四

事しあらば 火にも水にも 入らばやと
思ふがやがて 日本魂

【通釋】一旦國家に大事の起つた場合には、火の中水の中へ

一三五

でも飛び込まうと思ふ、その雄々しい奉公の心が、即ち我が日本魂である。

一九五

世は安く 治まりぬとて 人皆の ゆる
ぶ心ぞ 仇になるべき

【通釋】 世の中が、安らかに治まつたからといつて、人々が油断をすると、その油断の心が國の仇となるであらう。

一九六 武

弓矢もて 神の治めし 國人は 事なき

世にも 心ゆるぶな

【通釋】 弓矢をもつて、神の御治めになつた我が國の人民は、世の無事な時にも、油断をしてはならぬ。

一九七

事なしと ゆるぶ心ぞ なかくに 仇
あるよりも 危かりける

【通釋】 無事であるからといつて、油断をする其の心が、敵のあるのよりも、却つて危いことである。

一九八

大八島^{オホヤシマ} 守らむ艦の 年々に 數添ふ世
こそ うれしかりけれ

【通釋】 一首の意はおのづから明かである。守らむ艦といふのは、國を守るべき軍艦などを、さゝれたのである。

一九九

仇し野に いざかゞやかせ ますらをが
とぎすましたる 太刀の光を

【語釋】 「仇し野」敵の居る野原。

【通釋】 さあ、我がますらをが、とぎすました太刀の光をば、

戦場にかゞやかせよ。今こそ日頃錬り鍛へた武勇をあらはすべきときである。

二〇〇

石だたみ 堅き砦も いくさ人 身を捨
て、こそ 打ち碎きけれ

【通釋】 石をたゞみ上げて、堅固に出来て居る城砦も、我が軍人が、身を捨て、打ちかゝり、美事に打ち碎いてしまつたことである。

二〇一

この御製は露國との戦争の耐なる明治三十七年九月二十七日に於て、明争の耐なる露國との戦争の御製は、この御製は、露國との戦争の耐なる明治三十七年九月二十七日に於て、明争の耐なる露國との戦争の御製は、

國を思ふ 道に二つは なかりけり 戦
の場に 立つも立たぬも

一四〇

【通釋】 戰場に立つ軍人も、國內に在つて働く國民も、國の爲めを思つて盡す道には、かはりがないことである。

一一〇二

子等は皆 戦の場に 出ではて、 翁や
一人 山田守るらむ

【通釋】 家の若いものどもは、皆戰場に出てしまつて、あとに残つた老人が、唯一人で、農事を力めて居ることである。

あらう。

一一〇三

如何ならむ 事に遇ひても 撓まぬは
我が敷島の やまとだましひ

【通釋】 どんなことに出あつても、心のたゆむといふことのないのが、我れ等の日本魂である。

一一〇四

うつせみの 世の爲すゝむ 軍には 神

一四一

も力を 添へざらめやは

【通釋】 世のためにとて、進んで行く仁義の軍には、どうして、神も力を御添へにならぬといふことがあらうか。

一一〇五

静かにも 世は治まりて 喜びの 盃あげむ 時ぞまたるゝ

【通釋】 世が静かに治まつて、國民と共に、祝盃をあける時の來るのが、一日も早かれと、待たれることである。

一一〇六

岩が根の こゞしき山を 照る日にも
撓まず越ゆる 我が軍人

【語釋】 「こゞしき山」けはしい山。

【通釋】 我が義勇な軍人は、太陽がちりくくと照りつける暑い日中にも屈しないで、岩石のそばだつたけはしい山を、越えて行くことである。

一一〇七

端居して 月見るほども 戦ひの 場の
ありさま 思ひやりつゝ

【語釋】「端居」縁先などに居ること。

【通釋】端居して月を見て居る間も、戦場の有様はどうであらうかと、絶えず思ひやられることである。

一一〇八

夢さめて 先づこそ思へ 軍人 向ひし
方の たより如何にと

【通釋】眠りからさめると、先づ第一に思はれるのは、我が軍人が出向つた方面の戦報は、果してどうであらうかといふことである。

一一〇九

限りなき 世に残さんと 國の爲 斃れ
し人の 名をぞとゞむる

【通釋】一首の意は明かである。名をぞとゞむるは、その氏名を書きとめること。

一一一〇

如何ならん 薬すゝめて 國の爲 いた
でおひたる 身を救ふらむ

【通釋】戦場では、日夜多くの負傷者が、出ることであらう

が、どんな薬をすゝめて、それ等國家の爲に負傷した者を、救うて居ることであらうか、さてくゝ氣遣はれることである。

一一一

戦ひの爲に力を盡くしたる民の心をやすめてしかな

【通釋】 戦争の爲に、それくゝと力を盡くした國民は、さぞ疲れて居ることであらう、どうかして、この國民の心を、やすめてやりたいものである。

一一二

國の爲 たゞすなりにし民草に恵みの露をかけなもらしそ

【語釋】 「なもらしそ」 もらすな。

【通釋】 國の爲に、力を盡くしてたゞなくなつた國民の上に、もれなく、恵みを施すやうにせよ。

一一三 靖國神社に行幸まし〜て

神垣に 涙手向けて 拜むらし かへるを待ちし 親も妻子も

【語釋】「神垣」神社のまはりの垣又は神社、こゝでは神社の意。

【通釋】無事に凱旋する日を、待ちわびて居た、親も妻子も、今は、神前に、涙を手向けて、拜することであらう。

一一四

國の爲 斃れし人を 惜むにも 思ふは
親の 心なりけり

【通釋】國の爲に戦死したものを、惜むにつけても、その親の心が思ひやられることである。

一一五

かちどきの ひゞくにつけて むら肝の
心たゆむな 我が軍人

【通釋】戦争に勝つたからといって、油断をするな、我が軍人よ。

一一六 祝言

うけつぎし 國の柱の 動きなく さか
え行く世を なほ祈るかな

【通釋】神代の古から受けついで来た我が國の基が、永遠に

動くことなく、益々榮えて行くことを、なほこの上にもと祈ることである。

一二七

神代より 承け継ぎし世は 生みの子の
末の末まで 榮え行くらむ

【通釋】 神代の昔から受けついで來た此の世は、我が子子孫孫に傳へて、末の末までも、榮え行くことであらう。

一二八 水石契久

さゞれ石の 巖とならむ 末までも 五

十鈴の川の 水は濁らじ

【語釋】 「さゞれ石」 小さな石。五十鈴の川の水「萬世一系の皇統におたとへになつたものと拜せられる。五十鈴川は伊勢神宮の境内を流れて居る川である。

【通釋】 小さな石が成長して巖となるといふやうな、幾千萬年の長い末までも、五十鈴の川水は濁ることなく、清く流れるであらう。天壤無窮の皇運を歌はせられた御製と拜せられる。

一二九 述 懷

曉の ねざめ靜かに 思ふかな 我が政

事 いかゞあらむと

一五二

【通釋】 夜明けの眠から覺めて、先づ心靜かに思ふことは、
我が行つて居る政治が、果してどうであらうかといふ
ことである。

一三二〇 夜 述 懷

夏の夜も 寢覺めがちにぞ あかしける
世の爲思ふ 事多くして

【通釋】 一首の意は明かである。夏の夜はいと短い、この「夏
の夜も」の御言葉に、特に注意せねばならぬ。

一三二一 夏 山 水

年々に 思ひやれども 山水を くみて
遊ばむ 夏なかりけり

【語釋】 「山水をくみて遊ばむ」山地に暑を避けることを仰せ
られたのである。

【通釋】 毎年夏になると、心では思ひを山水清涼の境に馳せ
ることであるけれども、ついぞ實地に遊んで見る暇の
ないことである。

一三二二 夏 述 懷

一五三

政事 出でてきく間は かくばかり 暑
き日としも 思はざりしを

【通釋】 政事をして居る間は、こゝも暑い日とは思はなかつたのに、退いて見ると、さてく暑いことである。

一三三三 秋 夜

秋の夜の 寢覺め静かに 思ふこと 國
と民との 二つなりけり

【通釋】 一首の意は明かである。秋の長夜の御寢覺めにも、常に御思ひの存する所が、國と民との二つであつたと

いふことに深く注意すべきである。

一二二四

末遂に ならざらめやは 國の爲 民の
爲にと 我が思ふこと

【通釋】 國の爲、民の爲にと企て、居る自分の思ひが、どうして、遂には成功しないといふことがあらうか。

一二二五 忠

空蟬の 世は安らかに 治まりぬ 我れ
を助くる 臣の力に

【通釋】 我を助けて呉れる臣民の力に依つて、此の世は安らかに治まつて居ることである。

一三二六 河水久澄

神代より 流れたえせぬ 五十鈴川 猶
萬代も 澄まむとぞ思ふ

【通釋】 神代の昔から、清い流れのたえたことがない五十鈴川は、今後なほ萬代の末までも、澄むことであらうと思ふ。

一三二七 河水流清

五十鈴川 清き流れの 末汲みて 心を
あらへ 秋津洲人

【語釋】 「秋津洲人」日本人。

【通釋】 我が日本民族は、神代ながらの、五十鈴川の清い流れの末を受け汲んで、何時も心を清らかにせよ。

一三二八

神つ代の 御代のおきてを たがへじと
思ふぞ己が 願ひなりける

【通釋】 神の御代から定まつてゐる、其のみおきての旨に違

はないやうにしたいといふのが、自分の心願である。

一三二九

傳へ來て 國の寶と なりにけり ひじりの御代の みことのりぶみ

【語釋】「ひじりの御代」神聖なる皇祖皇宗の御世。「みことのりぶみ」詔勅の文書。

【通釋】昔から傳へて來た、皇祖皇宗の詔勅は、まことに尊い國の寶となつて居ることである。

一三三〇 神 祇

ためしなく 開け行く世を 見ることも 導く神の あればなりけり

【通釋】古には例がないほどに、盛に開けて行く世を見ることが出来るのも、全く導き輔けてくださる神があるからである。

一三三一 教

開け行く 時にいよく 仰がれぬ 聖ヒコノミの御代の 高き教へは

【通釋】世が開けて行くに當つて、彌々高く仰がれるのは、

皇祖皇宗の御代の、尊い御教である。

一六〇

一二三二

我が國は 神の國なり 神まつる 昔の
てぶり 忘るゝなゆめ

【語釋】「昔のてぶり」昔のならばし。「ゆめ」決して。

【通釋】我が國は神國であるから、神をまつる昔のならばし
を、決して忘れてはならぬ。

一二三三 民

國の爲 いよく 盡くせ 千萬の 民の

心を 一つにはして

【通釋】一首の意は明かである。「一つには」のはは意味を強
くいひあらはす言葉である。

一二三四 民

千萬の 民よ心を あはせつゝ 國に力
を 盡くせとぞ思ふ

一二三五

國民は 一つ心に 守りけり 遠つ 皇祖

一六一

の 神の教を

一六二

【通釋】 國民は皆、心を一つにして、遠い皇祖の神々の遺し給へる御教へを、守つて居ることである。

一三三六 高山正之

國の爲 心盡くして 高山の いさを空
しく はてしあはれさ

【通釋】 國の爲に心を盡くした、高山正之の、その高い志も、成功するに及ばないで、空しくはてたのは、誠にあはれなことである。

一三三七

しきしまの 大和島根の 教へ草 神代
の種の 残るなりけり

【通釋】 我が日本の國の教は、神代の昔からの精神が、本となつて、傳はつて居るのである。草といひ、種といふのは、何れも縁語である。

一三三八 柱

眞木柱 立ちさかゆるも 動きなき 家
のあるじの あればなりけり

一六三

【語釋】「眞木柱」柱をほめていふ。

【通釋】家の柱が動くことなく、家道の榮えて行くのも、しつかりとした家長があつて、よく家を整へて行くからである。

一三三九 秋 燈 火

秋の夜の 長きにあかず 燈火を かゝ
げて文字を かきすすさみつゝ

【語釋】「かきすすさみ」それからそれへと書き進むこと。

【通釋】秋の夜の長いにもあきずに、夜の更けるまで、燈火をかゝけて、文字を書きすすさむことである。

一四〇 窓 前 竹

わらはべが 學びの窓の 吳竹の 年々
しげく なるぞうれしき

【語釋】「吳竹」はちく竹の異名、又眞竹の異名にも用ふ。

一四一

くもりなき 人の心を 千早振る 神は
さやかに てらし見るらむ

【通釋】くもりのない、清らかな人の心をば、神ははつきりと、照らし見られることであらう。

一四二子

一六六

思ふこと おもふがまゝに 言ひ出づる
幼心や まことなるらむ

【通釋】 自分の思ふことを、思ふ通りありのまゝに言ふ幼子の心といふものは、それが眞のまことといふものであらう。

一四三

うつせみの 人のまことを 萬代に の
こすや歌の 調べなるらむ

【通釋】 歌は人の心を、ありのまゝに、あらはしたものであるから、人のまことといふものを、遠い後の代まで残すのは、歌のしらべであらう。

一四四 歌

まごころを 限りなき世に とゞむるも
やまと言葉の いさをなりけり

【通釋】 人々のまごころを、そのまゝ限りなき後の世に、残すことの出来るのも、やまと言葉の歌の手柄である。

一四五 太 刀

一六七

身にはよし 佩かずなりても 劔太刀
とぎな忘れそ 大和心を

【通釋】 たとへ身に劔太刀を、つけないやうになつたからとて、大和心をとぎ磨くことを、忘れてはならぬ。

一二四六

限りなき 天つ御空を 心にて おもひ
のどめむ 世の中の事

【語釋】 「思ひのどむ」心靜にゆつたりと、おちつかせること。

【通釋】 限りなく廣い空をば、我が心として、心せわしい世

の中のことを、ゆつたりとおちつかせて行くやうにしよう。

一二四七 寄松述懷

千年には あらずともよし 常磐なる
松の操に ならひてしがな

【通釋】 松は千年の齡を保つといふが、たとへその千年でなくとも、あのけだかい松の操だけには、ならひたいものである。

一二四八 新年祝言

あら玉の 年もかはりぬ 今日よりは
民の心や いとゞひらけむ

【語釋】「いとゞ」いよく、ますく。

【通釋】年もかはつて、新しい正月が来た。今日からは、國
民の心も、いよく開けて行くことであらう。

一四九 机

寄りそはむ 暇はなくとも 文机の上
には塵を すゑずもあらなむ

【通釋】寄り添うて、學問をする暇はなくても、机の上には
塵を積らせぬやうに、したいものである。

一二五〇 草

種なくて ひとり生ふるは 空蟬の 人
の心の 物忘れ草

【通釋】人の心といふものは、とかく、物事を忘れ易いもの
であるといふことを、草にたとへて、御詠みになつた
のである。

一二五一 竹

石垣の ひまに生ひたる くれ竹は 千
代を貫く 根ざしなるらむ

明治十四年
御製會始の
歌御製である

一七二

【通釋】 石垣のすき間に生えてゐる竹は、千代の末まで貫き通して繁けるほどの、強い根ざしがあるのであらう。
「根ざし」は根のさしこんで居るのをいふ。

一五二 竹有佳色

植ゑ置きし 庭の吳竹 よゝを経て か
はらぬ色の たのもしきかな

【通釋】 庭に植ゑておいた吳竹が、幾年たつても、變らない色をあらはして居るのは、誠にたのもしきことである。

一五三 綠竹年久

九重の 臺ウケテの竹の 深綠 かはらぬ影ぞ
久しかりける

【通釋】 九重のうてなの竹は、いつも變らない深綠の影をあらはして、久しく茂つて居ることである。

〔附注〕 禁秘鈔に「中殿東庭竹臺二」とあり禁腋秘鈔に「仁壽殿の西向の北方に吳竹の臺あり」と見ゆ。(やまと心)

一五四 寄水述懷

世は如何に くだりゆくとも 河水の
濁らざらなむ 人の心は

明治十九年
御製會始の
歌御製である

一七三